



2022年雨期作の収穫ピークを迎える！

成果 1: 栽培技術



< プルトでの収穫イベント >

1. Farmers Field School (FFS) 雨期作の進捗

5月には、第6回目(収穫および収穫後処理)のFFSワークショップをブルト灌漑スキームで計5回実施し、計85名のFFS参加農家および16名の普及員が参加した。

2. 雨期作の進捗および生育調査

マリアナI灌漑スキームの全農家およびブルト灌漑スキームのベマセ地区の農家は収穫を迎えた。一方、栽培開始時期がより遅いブルトのラレイア地区の圃場では、成熟期になる。ラレイア地区では、昨年と比較しより多くの農家が基肥を適切に行ったことが分けつ数増加に繋がったと考えられる。

3. マリアナIでの収量調査

マリアナIの全FFSモデルおよびリード農家圃場の収量調査およびそのデータ集計が終了し、FFS全参加農家の平均収量は5.3 トン/haであった。

成果 2: 灌漑管理



< ゲートキーパーによる水門点検 >

1. 年間活動計画

5月10日にタスクグループ会議を開催し、関係者で2022年5月から2023年4月までのブルトならびにマリアナIの両灌漑スキームでの年間活動計画が話し合われた。

2. 支線水路水管理人(Kabu-wee)に対するワークショップ

5月26日にブルトにおいて、水利用組合(WUA)の主導にて、支線水路水管理人に対するワークショップが行われ、6月20日より支線水路水管理人により水利費徴収を開始すること、および水利費徴収と合わせ農家台帳を更新することが全参加者により合意された。また、全受益農家を対象とするブロックミーティングを7月から13回に分けて実施する予定。

3. ゲートキーパーに対するOJTの継続

ブルトとマリアナIの両灌漑スキームにおいて、灌漑管理マニュアルに基づいたゲートキーパーに対するOn the Job Training (OJT)が継続実施されており、今月のOJTでは特に、施設点検と点検内容をフォームに記入することに重点を置いた。

4. マリアナI灌漑スキームでの水利費徴収

支線水路長による水利費徴収が継続され、5月末日時点で約32%の徴収率であった。

成果 3: 物流と販売 (民間)



< 措置後の脱穀機オペレーション >

1. チャクブ農家組合の脱穀機

チャクブ農家組合が4月にグループリーダー会議を開き、メンバーシッププログラム参加農家間での脱穀機のレンタル方法につき話し合いが持たれたが、初回のトライアル時に脱穀機が上手く動作しなかったため、メンバーシッププログラム参加農家への脱穀機レンタル手配に遅れが生じた。このため、プロジェクトはチャクブ農家組合や農家と協力し、脱穀機の動作を確認し、発見された課題をもとに今後の解決策について検討した。

2. チャクブ農家組合への糶搬入

チャクブ農家組合は、メンバーシッププログラムに登録した農家に対してコメ栽培用に化学肥料を配布し、収穫後に肥料の代金として対象農家から糶の回収を開始しており、5月末時点の糶受け入れ量は14.3トンであった。

3. チャクブ農家組合とNatioanl Logistic Center (NLC)との販売契約

チャクブ農家組合はNLCに対して50トンの精米を納品する契約を取り交わした。他方でNLC側の書類審査を通過しておらず、倉庫への納入許可が下りるのは、遅れる見込みである。

成果 4: 買取と配布 (政府)



< NLC新コメ買取説明会 >

1. NLCによる買取説明会

マリアナI灌漑スキーム周辺地域で4月に実施した説明会に続き、ブルト灌漑スキームのラレイア地区においても、NLCによる2022年の新コメ買取システムに関する説明会を実施した。これまでの説明会では、NLCは今年は精米(白米)のみを買い取ると説明してきたが、精米(白米)だけでなく糶による買取も農家から強い要望があることを考慮し、今回の説明会では、民間企業を通じて精米を買い取ることも追加された。

NLCは民間企業14社と国産米売買に関する契約を結ぶ予定で、計画購入量は1,500トンである。

2. 精米所調査

上記のように精米による取引が多くなると予想され、農家が周辺の精米所で精米を依頼することが予測されることから、ブルト、マリアナI、マリアナII、カイラコにて精米所の数や1日当たりの生産能力に関する調査を行い、各々25、28、10、18台の精米所が存在することが判明した。

成果5: 活動・教訓の共有



< バウカウ県の種子生産組合視察 >

1. マリアナIからブルトへの交換訪問

マリアナIから、MAFボボナ口前事務所長、普及員、灌漑職員、FFS参加農家を含む10名がブルトを訪問し、種子生産組合やブルト灌漑施設を視察し、FFA収穫祭に参加すると共に、ブルト関係者と共にイネ栽培技術や灌漑管理について意見交換を行った。両灌漑地域にて、イナ作および灌漑管理の更なる改善に繋がることが期待される。